AMDA 多様性の共存 ジャーナル

2022 年 7 月 25 日　VOL.45　第 302 号　定価 550 円
発行／ AMDA　〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp
郵便振替：01250-2-40709　口座名：特定非営利活動法人アムダ

2022 年 夏 号　夏

救える命があればどこまでも

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
https://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
https://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
https://www.amdamedicalcenter.com/
AMDA 兵庫　http://amda-hyogo.com/

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第 33 回
真言宗御室派薬園山長泉寺住職　宮本　龍門　様

AMDA を支えてくださっている方々の様々なエピソードをインタビュー形式でお届けします。今回は、真言宗御室派薬園山長泉寺ご住職の宮本龍門様（以降敬称略）です。　（聞き手：AMDA 理事　難波　妙）

AMDA　龍門ご住職が中学生の時、通っている学校にお父様が AMDA の活動報告に来られたことがあったそうですね。

宮本　父である光研は、1996 年に中国雲南省大地震の被災地で AMDA が行った小学校の再建プロジェクトに参加しました。活動に協力した私の中学校に、現地の小学校から「感謝の旗」を届けるよう父に託されたそうです。何も聞かされてなかったので、突然の登場に大変驚きました。そんな父に連れられて AMDA に支援物資を運んだこともあります。

AMDA　龍門ご住職には、2011 年の東日本大震災、2018 年の西日本豪雨災害の支援活動にもご尽力いただきました。

宮本　長年、父の活動を傍で見てきたこともあり、加えて今でも覚えているのは、2010 年頃、菅波さんがしきりに「宗教者には是非現場に出てほしい」と強調されていたことです。「現場には宗教者としての役割がたくさんある」と。その言葉を胸に 2011 年 3 月 18 日に AMDA の調整員として岡山から車で被災地に向かいました。

AMDA　今でも鮮明に残っている記憶はありますか？

宮本　何よりも先ず、私が行った釜石市や大槌町の景色ですね。大槌町にいたっては町のほぼすべてが被災しており、とてつもない瓦礫の山でした。それを見た時、生き残った人々はきっとその土地をあきらめて、他の場所で生活を再建されるだろうと思いました。あの膨大な量の瓦礫を除けて町を元に戻すという作業には、途方もない時間と労力がかかるし、正直、合理的でないと感じたのです。しかし、実際には多くの方がその被災した土地に残られました。私も AMDA の調整員としての活動の傍ら、釜石市の遺体安置所で読経したり、避難所となっていた寺院の朝勤行に参加させていただき肌で感じましたが、そこには「祈り」が大きく関わっていると思います。震災に遭って助かった人というのは、「自分はなぜ生き残ったのか」「亡くなった方々は何を思うだろうか」と考えざるを得ません。だからこそ祈りを通じて亡くなった方々の想いや願いに触れることが大切です。考えてみれば、亡くなった方の多くがその町を創り、守ってきた方々なんですよね。「故郷に留まって故郷を復活させよう」というエネルギーやモチベーションは、そこから生まれるのだと思います。

AMDA　失わないとわからないものがありますね。

宮本　当たり前というのは、当たり前でなくなった時にしか気付けないのが人間ですよね。若い頃は、お年寄りがお寺に来て、ひたすらに「ありがたい、ありがたい」と言っていることがあまり理解できませんでした。でも、今、戦争の真っただ中にいるロシアやウクライナの人が、いつもの教会へ行っていつもの仲間と会って帰るという平和な時間を過ごすことができれば、それはきっと「ありがたい」と思うでしょう。平和が当たり前な私たちにはわからない感覚ですよね。

AMDA　血を流さずに平和な世界に向かうことはできないのでしょうか？

宮本　政府というのは国の利益を守ることが一番の仕事ですから、他国と利害が対立してしまうのは必然的なこととともいえます。じゃあどうすればよいかというと、私は民間の交流が大事だと思います。経済的、文化的な交流を通して、コミュニケーションを積み重ね、相手をよく知ることで信頼も醸成されます。政府間が対立する時に、民間レベルで「あの人たちと戦うのは嫌だ」と思えるかどうか、そこが平和のための肝となるのではないでしょうか。

被災地での朝勤行の様子

インド・ビハール州ブッダガヤ：妊婦さんへの健康相談および健康教育と栄養プログラム

インド・ビハール州では新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2年間で数回の都市封鎖が実施されました。これにより、失業者が急増し、特に妊婦さんの栄養不足が課題となりました。 ブッダガヤにあるAMDAピースクリニック（APC）では、彼女たちの健康相談を行うとともに、その家族を対象とした食糧支援を実施しました。

今年に入ってから都市封鎖が解除され、ブッダガヤを訪れるインド国内の観光客も少しずつ戻りつつあります。「仕事が増え、失業者も収入を得られるようになった」と、APCのスタッフから報告を受けました。そのため、今年の3月末で、月に2回配布していた食糧支援を終了しました。

新型コロナウイルスの感染が拡大する前は、週に一度、健康教育と栄養プログラムを実施していました。その中で、妊婦さんや授乳中のお母さんに必要な栄養摂取について指導を行い、実際にAPCで調理した食事を試食してもらっていました。APCでは今年4月からこれらの活動を再開。現在は、妊婦さんや子供を連れた母親など約20人が毎週水曜日に集い、プログラムに参加しています。

一方、依然として新型コロナウイルスの感染リスクは残っています。このため、現在は大きめの部屋を使用し、マスク着用を原則として、距離を保って座ってもらい、果物やスープなど栄養プログラムで紹介した食べ物も、その場では一切食べずに持ち帰ってもらうようにしています。参加者は、「妊娠中の健康のことや、栄養のことなど、いろいろと教えていただき、うれしいです」と話しました。

（インド担当 アルチャナ ジョシ）

続・フィリピン台風22号（オデット）緊急救援活動

2021年12月にフィリピン中部シアルガオ島をはじめ、ボホール島やセブ島などに甚大な被害をもたらした台風22号（オデット）。AMDAは発災当初よりAMDAフィリピンや現地協力団体とともに緊急救援活動を実施し、その後も中・長期的な支援を継続しました。

特筆すべきは、現地のオートバイ愛好家のグループがバイクで被災地をまわり、マニラなどの都市部から救援物資を届けた「子どもキャラバン隊」の活動です。その目的は、被災した子どもたちに玩具や学用品、食料品などを提供し、マジックショーを通じて元気になってもらうことでした。2021年の12月から始まり、2022年1月、3月と計3回に渡って行われました。

その際に掲げられたのが、”United in Sharing Love!”（「愛を分かち合うために団結」）というスローガンです。単なる救援物資の配布に留まらず、「活動を通じて人々に感動を与え、心に”愛の種”を植えたい」という主催者の強い思いが込められています。

こうした一連の流れが、公的機関や市民団体、さらにはフィリピン国防大学、公安大学などの組織を動かすことになり、中には、それまで政府の支援が行き届いていなかった地域にキャラバン隊が入ったことで、その後の公的な支援に繋がったケースも見られました。

現地からの報告では、「”愛を分かち合う”という行為が、地域における災害からの回復力を高め、人々に協力を促すよう期待したい」と、活動を総括しています。

（AMDA本部　近持　雄一郎）

次世代の平和への想い

AMDAはこれまでたくさんの方々のご支援とご協力によって、多くの経験を重ねてきました。そこで学んだ様々な知見を、学校での講演や出前授業、本部見学、職場体験やインターン等を通じて伝えることが次世代の教育に繋がると考えています。

3月

山陽学園中学校2年生に「人権平和講演会」を実施。3年次に予定されている海外研修を念頭に、生徒たちはAMDAが大切にしている「相手を知ること」や「相互扶助」、更にAMDAのウクライナ避難者支援活動について聞きました。講演会後半には、生徒たちが「今、自分が平和のために出来ること」「大人になってから出来ること」について意見交換を行いました。講演会後、ウクライナのために出来ることを探すようになった人、相手を知るために外国の文化や言葉を勉強しようと思う人などが現れました。

また岡山市立石井小学校6年生を対象に行った「国際貢献」に関する講演の中でも、生徒各自が平和のために何ができるかを考え、講演後には学校全体に募金を呼びかけました。卒業式の前日、6年生から「ウクライナの方々が心配です」「早く平和になりますように」と、募金箱を手渡されました。

このほか、「ウクライナ支援のために何かできれば」と、ノートルダム清心女子大学の学生たちがAMDA本部にボランティアとして来てくれるようになりました。

翌月、同大学でAMDA理事が「国際支援活動とボランティア」と題して講義を行った後、AMDAでボランティアを行っていた学生たちが「ウクライナのために自分たちが出来ること」として、学内での募金活動を呼びかけました。有志約20人が集まり、ポスターや募金箱を作成の上、5月に募金活動を実施。AMDAに寄贈していただきました。

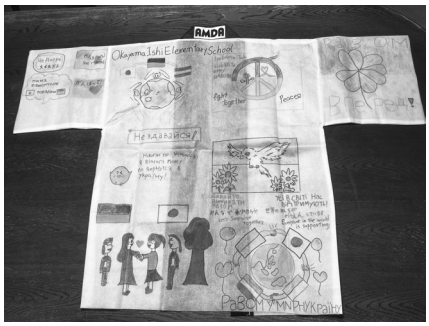
4月

AMDA職員が岡山県立大学の3年生11人を対象に授業を行いました。その中で聞いたウクライナ支援のことや、AMDA本部でのボランティア体験を通じて、現在、数人が実際に本部でのボランティア活動に携わっています。

5月

5月10日から3日間、岡山市立旭東中学校から3人が職場体験のためAMDA本部へ。AMDAについての説明を聞いた後、物資の仕分け作業や、事業の一環として東北へ送るお米の発送作業に関わりました。また、職場体験中にウクライナの支援活動について学校でパネル展をすることを決定。実際にハンガリーで支援に携わった人たちやウクライナの方たちの話を聞き、展示物の作成を行いました。

6月



7月2日、ハンガリーにて、ウクライナ避難者支援の一環として料理コンテストが開催されます。その際、AMDAの派遣者や現地協力者たちは日本の法被を着用します。それらの法被に、前述の石井小学校、岡山県下の南海トラフ災害対応プラットフォーム参加自治体の中学校、ノートルダム清心女子大学附属小学校、AMDA中学高校生会やおかやまコープの方々が絵を描き、日本語、英語、ウクライナ語でメッセージを綴りました。

2月24日に発生したウクライナの人道危機から約5ヶ月、AMDAは多くの学校や団体などを通じ、日本の若者たちが様々な形で表現する「ウクライナの方への願い」や「平和への想い」に触れてきました。「平和のために自分が出来ることを行動に移そう」という気持ちに深い感銘を受けました。私たち大人も、この「平和」と「希望」を当然と思わず大切にしていくということを、これからの日本を担う次世代の人たちを通じて感じました。

（GPSP支援局　総務担当　ブルックス　雅美）

ウクライナ避難者緊急支援活動

現在の活動状況について

6 月 22 日現在、AMDA が看護師兼調整員を派遣しているハンガリー・ベレグスラーニーのヘルプセンターには毎日平均 200 ～ 600 人程度の方々がウクライナから逃れてきています。この数は 4 月の上旬からほとんど変わっておらず、継続的に国外に避難する方々がいます。避難してくる方の大半は女性とその子どもです。現在は、避難者の方を次の都市に輸送するバスの連携がかなり改善しており、ヘルプセンターに留まる人の数が減ってきています。これに伴ってヘルプセンターでの医療ニーズも減少傾向にあります。避難者の方々に一番多く見られる症状は、極度の緊張状態を強いられたことによるストレスに起因した高血圧とこれによる頭痛です。AMDA は現地協力団体 MedSpot の医師と協力して診察を行い、必要な薬を処方しています。また、ストレスの軽減を目的として避難者の方々の思いを傾聴したり、マッサージ、足湯などのリラクゼーションを提供したりしています。

医療支援以外にも、キシュバールダ市にあるカルパッチヤハウス（ヴァルダ伝統文化協会）と協力し、ウクライナに食糧や医療物資を支援しています。ウクライナ国内に残っている人々には、避難先での仕事がなかったり、子どもや年老いた両親を世話したりするために避難したくてもできない人などが多いと報告を受けています。爆撃など危険地域にいながらも避難できていない方々は金銭的に困難を抱える方が多く、より手厚い支援が必要な人々と考えられます。また、ウクライナ国内で避難することができた方も避難先で仕事を見つけられることができるとは限らず、食糧や住居等、避難してから生活を立て直すまでに多くの支援が必要となります。

『避難者の方々との出会い』　榎田倫道看護師からの報告

「4 ヶ月間の活動を通じて多くの避難者の方々と出会いました。控えめで遠慮がちな方が多く、支援物資を差し出してもすぐには受け取られなかったり、医療支援が必要でもなかなか言い出せずにいたりする場面が度々あり、日本人に近いような感覚を持った方々が多い印象を持っています。

ベレグスラーニーのヘルプセンターには、日常を突然奪われ、傷ついた人たちがやってきます。多くの悲しみや困難を抱えた人たちと接する中で私が学んだことの中に子どもたちの力があります。ある日、40 代のお母さんと 10 歳くらいの女の子がウクライナ北東部から数日かけてヘルプセンターにやってきました。女の子のお父さんはウクライナ国外に退去できない年齢であるため、地元に残っているとのことでした。そのお母さんは、お父さんのこと、爆撃が続く地元のことを思い出し、泣いてしまうことがありました。そのような時は幼い娘さんが小さな手でお母さんを抱きしめたり、じっと見つめて『大丈夫だよ』と声をかけたりして励ましていました。そんな子どもたちの人をいたわる姿や無邪気な笑顔を見ると、支援をしている側の私も元気づけられ疲れが吹き飛びました。支援を一方的にしているのではなく、私自身もこの方々に支援されているのだと感じた瞬間でした。私がウクライナの方々と直接関われるのもあと二週間程度となりました。私はこの笑顔の力を信じ、ここに来る避難者の方々の痛みが少しでも軽くなるように笑顔で活動を続けていきたいと思います。

最後になりましたが、ウクライナ支援にご支援をいただき、関心を寄せてくださっている皆様に心からお礼申し上げます。私たち AMDA の活動がご寄付で成り立っていること、AMDA が日本から支援に来たことを避難者の方々に伝えると多くの感謝の言葉をいただき、中には涙を浮かべる方もいらっしゃいました。ウクライナで人道危機が起こってから時間が経過するごとに関心は薄れていくものです。ですが、ウクライナの方々が皆様に心から感謝されていることを現地からお伝えしておきたいと思います。ある高齢のウクライナ人の男性は、こう言いました。

『日本の人たち、私たちウクライナのことに関心を持ってくれてありがとう』」

ウクライナ避難者支援活動に参加した医師達より

「ウクライナとハンガリーの国境の村で、現地の医療団体や医師らと協力しながら、仮設診療所での医療支援活動でした。避難の途中でけがをしたり、薬を飲むことができず持病が悪化したりと、様々な症状を訴える方が大勢いました。仮設診療所内での治療困難なケースでは、救急隊と連携して地元の病院への搬送なども行いました。緊張やストレスによる症状を訴える方も多く、長い距離を歩いて避難してきた人には脱水症状も見られました。ストレスが病気をつくります。長引けば長引くほど、健康状態の悪化が懸念されます。この先も復興を視野に入れた支援が必要です。ウクライナの人々から話を伺う中で、何度も心が潰れるような思いになりました。ウクライナの人々が日常を取り戻すまで、私たちにできること考え続け継続的な活動をしてまいります」

（AMDA 理事　佐藤 拓史）

「AMDA が 3 月 7 日に開始したハンガリーにおけるウクライナ避難者支援活動の第 4 次派遣隊員として 4 月 2 日～ 17 日の二週間、参加させていただきました。今後の先も見通せず、避難者も流動的で固定しないなど、これまでの災害支援とは異なる支援環境でしたが、少しでも避難者の方々の体と心の平安に繋がるようにと考え、医療のみにとらわれずに活動してまいりました。

戦争の終焉ができるだけ早く来ることを祈念し、全てのウクライナの方々が、数ヶ月前まで過ごしていたような平穏な生活を自国で取り戻せるまで、事相に応じた支援を我々もしていけたらと思います。そしてこれからのウクライナ復興を担うあの子供たちが強く賢く成長してくれることを願います」

（AMDA 緊急救援ネットワーク登録医師　鈴記 好博）

現地協力団体の担当者より

2 月 24 日にウクライナで人道危機が起こった後、3 月 9 日に AMDA の日本人医療スタッフが私たちの拠点であるハンガリーのキシュバールダに到着しました。早速連携して常時対応が可能なオンコールの医療チームを結成。スタッフ構成は、ウクライナ、ハンガリー、日本国籍の医師や看護師の 10 名です。現在もウクライナ領内を含む 4 つの拠点で支援活動を続けています。尚、この度、皆様からのご支援により、9 人乗りのバスを購入しました。避難者や救援物資の輸送に活用しています。ウクライナの製薬工場が閉鎖されたことを受け、AMDA と協力して、ウクライナ領内の小児病院や児童養護施設に物資を提供しています。取り残された母子のために家が建てられれば嬉しいのですが、それにはさらなる資金が必要です。AMDA のこれまでの多大なご支援に感謝するとともに、今後ともご協力いただけますよう宜しくお願いします」

（カルパッチヤハウス代表 医師　タチアナ エルデリイ）

「避難者の中には、精神的な問題やトラウマ、疲労から体調を崩す人が少なくありません。こういった人々を支える際、AMDA のスタッフによる献身的なサポートなくしては、我々の取り組みはほとんど意味をなさないといえるでしょう。医師から、看護師、学生ボランティアにいたるまで、時に大きな個人的犠牲を払いながら、彼らがウクライナからハンガリーに到着した人々のために一生懸命働いている様子を、私は何度も目の当たりにしてきました。避難者に話しかけ、絶望的な状況にある人々を親身になってケアする様子は、卓越したプロの姿勢そのものです。私たちは AMDA の素晴らしいスタッフと一緒に活動できることを誇りに思います」

（MedSpot 財団 理事　ベルナス ラズロ）

AMDA 鎌倉クラブ 閉会のご挨拶

本年4月22日をもって、AMDA鎌倉クラブを閉会とさせていただきました。これまで支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。

1999年発足以来、23星霜、コンサートやバザーなどの収益金を主にAMDAの緊急救援活動とホンジュラス事業に寄付してきました。総額は1,300万円を超えました。

これだけのことができたのは、根本にAMDAに対する絶大な信頼があり、そして清い心のスタッフに恵まれたからです。

AMDAの皆様が、これからもずっとこの尊い活動を続けてくださるよう願っています。　（AMDA鎌倉クラブ クラブ長　根津 伶子）

ウクライナ避難者支援活動へのご支援に感謝申し上げます

■ 岡山県内市町村

ウクライナ避難者支援活動の開始から、順次、岡山県下の全市町村に募金箱を設置していただいています。4 月 5 日には、総社市役所にて、集まったご寄付の一部が、片岡聡一市長から菅波茂 AMDA 理事長へと手渡されました。これらは総社市の方々が「ウクライナの人々のために役立ててほしい」と持ち寄られたものです。同月 8 日には備前市役所にて支援金贈呈式があり、吉村武司市長と菅波茂 AMDA 理事長が出席しました。

■ 岡山県経済団体

岡山県経済団体連絡協議会（岡山県商工会議所連合会、岡山県商工会連合会、岡山経済同友会、岡山県経営者協会、岡山県中小企業団体中央会）より県内の企業にお声がけをいただき、4 月 27 日、岡山商工会議所で支援金の贈呈式が行われました。式典には、3 月より 1 ヶ月間ハンガリーにて支援活動を行った難波妙 AMDA 理事が出席し、各位からのご支援に対して謝意を述べるとともに、活動報告を行いました。

■ 募金活動「まちかどトーク」へのご協力

AMDA は毎月を原則として、岡山市内の街頭に立ち、支援活動に関するパネル展示や情報交換、募金のお願いを目的とした「まちかどトーク」を実施しています。

4 月 5 日、ウクライナ避難者支援活動に際して行った「まちかどトーク」には、日本労働組合総連合会岡山県連合会（連合岡山）にご協力いただき、合同で募金の呼びかけなどを行いました。AMDA は 2021 年 9 月、同連合会と、災害発生時における情報交換や資金・物資提供などを盛り込んだ連携協定を締結しています。

上記のほか、多くの個人、企業・団体の皆様にご支援・ご協力いただき、厚く御礼申し上げます。ウクライナに対する支援も更なる長期化が予想されます。引き続き、ご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

「ウクライナ避難者緊急支援活動報告会」を行いました

3 月より隣国ハンガリーを拠点に実施中の「ウクライナ避難者緊急支援活動」の報告会を、5 月 3 日、岡山国際交流センターにて開催。同時に Zoom および YouTube Live でも参加・視聴いただきました（申込人数 65 人）。

派遣者 9 人のうち、難波妙調整員（AMDA 理事）が会場にて活動概要とウクライナ国内への物資支援などを報告。続けて、佐藤拓史医師（AMDA 理事）がオンラインにて、自身が診療を行った避難者の様子などを話しました。また鈴記好博医師（AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー）はビデオで、医療行為だけでなく、マッサージや環境整備など、必要とされる支援を行ったことを報告。最後は、ハンガリーで活動中の榎田倫道看護師（オランダ在住）が現地時間午前 4 時にも関わらず生出演し、避難してきた子どもたちのケアについて話しました。

その後の質疑応答では、言葉の壁や今後の AMDA の活動についての質問があり、菅波茂理事長および派遣者が回答しました。

（GPSP 支援局　総務担当　ブルックス　雅美）